

故温知新：古き漢字学習法から学ぶもの
FOLLOW THE OLD WAYS: A NEW APPROACH TO KANJI LEARNING

入戸野みはる
Miharu Nittono
コロンビア大学
Columbia University

1. はじめに

日本語学習者（特に非漢字圏の学習者）にとって、日本語を習得する上で最も難しいことの一つが漢字であるが、一体、学習者自身、漢字の何が難しいと感じているのであろうか。2009年秋学期に筆者が担当した初級クラスの学習者、16人（漢字圏5人、非漢字圏11人）を対象に調査を行ったところ、最も多く指摘された点は「覚えてもすぐ忘れる」（回答者の88%）であった。更に、漢字の学習方法について尋ねたところ、「何回も書く」（81%）に加え、「練習方法がよく分からない」（62%）との答えが返ってきた（複数回答）。この調査で、学生は反復練習の重要性は認識しているものの、具体的にどのような練習をしたらいいのかわからないでいるという現実が浮き彫りにされた。

そこで、2009年秋学期より、65分授業のうちの最初の10分を毎回、漢字学習のための時間に充て、筆者が子供の頃よく用いた、昔ながらの漢字の学習法を導入してみることにした。「故きを温ねて新しきを知る。先人の知恵に学ぶ」というわけで、これを「温故知新・漢字学習法」と呼ぶこととした。以下はその内容である。

- 1)空書き 2)指書き 3)言い書き 4)なぞり書き 5)写し書き 6)一人書き
- 7)友書き 8)水書き 9)筆ペン書き 10)筋書き 11)体書き 12)手書き
- 13)試し書き 14)縦書き

本稿においては、「温故知新・漢字学習法」の手法を一つ一つ紹介するとともに、この学習法の導入により得られた効果について述べたい。

2. 「温故知新・漢字学習法」の前提となっているもの

「覚えてもすぐ忘れる。」これは筆者が担当した初級クラスの学習者のほとんどが漢字学習の問題点として指摘した事項である。しかし、覚えていたはずのことを忘れてしまうのは、異常なことではない。むしろ脳にとっては、非常に重要なことなのである。日々、脳には膨大な量の情報が入ってきている。それら全てを漏れなく脳が記憶したとすると、脳は5分で限界になり、使えなくなってしまうという（TOSS加賀：2004）。そうならないために、脳は入ってきた情報をほとんど消しているわけである。すなわち、忘れることは、脳を正常に働かすために欠かせないことなのである。従って、どんなにいていねいに指導しても、次々に新しい漢字を習っていけば、忘れていくのが普通だということである。大切なのは「人は忘れるものだ」ということを前提に漢字の指導をすることである。筆者が提唱する「温故知新・漢字学習法」とはこの忘れやすい脳に何とか覚えてもらうための昔ながらの方法である。

3. 温故知新・漢字学習法：「空書き」と「言い書き」

では、温故知新の学習内容を細かく見ていくことにする。まずは、空書きである。これは、筆順を声に出しながら指を動かし、空中に字をイメージして書くという手法である(向山 2002)。この利点は、すぐにできて、ノートや筆箱を出す手間がかからないこと。そして、教師の側で学生全員の書き順を容易にチェックできることである。以下は、筆者のクラスでの「空書き」実践例である。

まず、翌日提出予定になっている漢字シートを学生に持ってこさせる。例えば、漢字の「山」が翌日提出予定の漢字シート内の漢字だとしよう。初めに、これを黒板に書く。「先生がなぞりますから、よく見てください」と言い、「山」をチョークで「イチ、二、サン」と言いながら、なぞる。(画数の多い漢字だったら、何回かやってみせる。)学生にも書き順を言わせながら、「空書き」をする。この時大切なのは「イチ、二、サン」と書き順を必ず言わせることである。つまり、「言い書き」させることである。

漢字を覚える際には、手(触覚)、口・耳(聴覚)、目(視覚)を使って覚えると最も効果的である。脳の仕組みからみて、感覚を統合して学習すると記憶しやすいとされている。特に聴覚は視覚より強く残りやすいので、書き順は必ず声に出して唱えさる。(椿原 2008; TOSS 加賀 2004) また、教師は鏡文字になるように空書きする必要がある。教師が鏡文字で「空書き」するのは、漢字が苦手な学生のためで、教師のまねをしながらやるとやりやすいという学生がクラスに何人かはいるからである。

4. 「指書き」

空書きの後は、机の上に「指書き」をさせる。指先には、神経がたくさん集まっている。神経というのは、体のいろいろなところと脳をつなぐ、とても重要な役割を果たしている。指先で何かに触ると、それが神経を通して脳に伝わり、脳の働きがよくなる。脳が働くと、物事が覚えやすくなる。つまり、「指書き」をするということは、脳の働きを活発にして漢字を覚えやすくすることだと言える(佐々木 1983,1987; TOSS 加賀 2004)。この「指書き」はいつでもどこでも誰でも繰り返すことができる。漢字のお手本の書き順を見ながら、人差し指で机の上に書く。「イーチ、ニーイ、サーン・・・」と画数を言いながら書く。また、画数を言わせる時には、その画の長さや、終筆の種類によって「イチ、二、サン」と短くしたり、「イーチ、ニー、サーン」と伸ばしたりする。これによって、漢字全体の形を捉えることができ、覚えやすくなるのである。この「指書き」に関しては、守るべき点が三つある。

(1) 空中ではなく机の上に指で書く。(2) 画数を言いながら書く。

(3) 見なくても書けるようになるまで書く。

この指書きを行えば、学生たちは新出漢字をほとんど覚える。が、一方で覚える代わりに、どんどん忘れてもいく。従って、ことあるごとに思い出させてやらなければ、脳に刻み込まれない。そこで、例えば、「駅」という字を書きなさいと指示する。もし、紙を用意して配って筆箱を出させ、鉛筆を持たせるとすると、これは非常に時間がかかる。しかし、ここで、「『駅』という字を隣の人の机に

指書きしてください」とすれば、何の準備も要らず、即座に始めることができるのである。

5. 筆順の重要性

ここまで筆者は書き順を言うことの重要性を強調してきたが、なぜ、それほど書き順が大切なのであろうか。まず、漢字の書き順には、ある程度の原則がある。例えば、上から下へ、左から右へ、外側から中側へなどである。私たち日本人はこうしたことを特別意識しなくても、正しい書き順で書いていることがほとんどである。しかし、日本語学習者はどうであろうか。書き順を教えないで、放っておくとデタラメに書く。つまり、教えないと学生は間違った書き順を覚えるのである。従って、初級の段階から正しい書き順をきちんと指導しなくてはならない。書き順の原則が自然に身につくと、新出漢字を全くデタラメに書くことは少なくなる（TOSS加賀2004）。

6. 「なぞり書き」

漢字シートに書いてある文字を鉛筆でなぞる。この時も書き順を言いながらなぞる。ここでは一ミリもずれないようになぞり書きさせることを徹底させる（椿原2008）。また、学習道具である鉛筆にも気を配る必要がある。筆者が勧めるのは4Bの鉛筆である。4Bは芯が柔らかく、無駄な力を入れずに書くことができるからである。そして、濃い字というのは、上手に見えることも事実である

7. 「写し書き」と「一人書き」

「なぞり書き」が終わったら、「写し書き」、「一人書き」である。こちらは時間の関係でクラス内ではできないので、宿題として家でやってくるよう指示している。まず、「写し書き」をする際には、以下の点に注意する必要がある。

(1) お手本とそっくりの字を書く。(2) マスからはみ出さないように書く。

(3) マスの中心に書く。

「一人書き」とは、最後のマスは自分で覚えたかどうか確認するために、お手本を隠して、一人で書く手法である。許容範囲でない、正しく、美しい字を書くことに留意したい。

8. 「友書き」

一人で漢字を練習し続けるのはまさに孤独であり、また、飽きが来る作業である。時には「友書き」が必要になってくる。「友書き」とは友達と一緒に漢字を習得することである。

「友書き」の一方法としては、漢字が得意な学生が先生になり他の学生を指導したり、クラスメートの漢字テストの採点をさせたりするとよい。クラスメートの漢字テストの採点にあっては、「友達のために厳しく見てやってください」と告げる。また、クラスでできる様々な漢字ゲームなども用いるとよい。筆者のクラスで、最も人気があったゲームは、その日までに習った漢字を偏と旁（または、

上と下の部分) に切ってバラバラにして学生に渡し、漢字が組み立てられたら黒板に書き、早く終わった人が勝ちというものであった。

9. 「水書き」

次に、水書きを紹介しよう。これは筆に水を付けて黒板に漢字を書くという方法である。墨だと汚れるし、墨をするのに時間がかかる。このやり方を用いると、お金をかけずして、はね、とめ、はらいといった細部の練習が、何度でもできる。特に、非漢字圏の学生にとっては、はね、とめ、はらいは非常に難しい技法であるが、これを習得すると、間違いなく文字全体がきれいになる。ただし、この手法にはただ一つ難点がある。それは、一人の学生の指導に手間どったりしていると、他の学生が書いた漢字がもう消えてしまっていることである。従って、指導は迅速に行わなければならない。

10. 「筆ペン書き」

次は、筆ペン書きに移りたいと思う。まず、図1の「永」という字を見ていただきたい。「永」には書道でよく使われる基本点画が八つ(点、横、縦、はね、右上へ、左払い、左下へ、右払い)入っているため、書道の勉強法としてよく用いられ、「永字八法」と呼ばれている。この「永」を完全にマスターすれば、美しい字が書けるようになる。

図1 「永字八法」



学生には学期始めに筆ペンを支給し、この基本八点画が完全に書けるようになるまでクラスで練習した。後に、家で好きな時に筆を使って漢字を練習するよう指示した。図2と図3は、学生の作品である。

図2 筆ペンで書いてみました(1)






図3 筆ペンで書いてみました(2)



すでにお気づきかと思うが、この漢字シートで書くべき漢字は「歌」「意」「味」「天」「考」の五つである。本来なら、この五つの漢字だけを練習して提出すれば、学生は宿題を完了したことになる。しかし、なぜ、下三段を空白のままにしてシートを提出する必要があるのであろうか。これは、非常にもったいない。資源の無駄である。ここで筆者は学生に言った。「皆さんはひとマスひとマス買っているわけですから、皆さんが練習したい漢字、漢字テストでできなかった漢字、何でもいいですから、書いて出してください。」最初は、なぜ余計に練習しなければならないのかといった不満の声もあったが、「最終的には、非常に有効な練習方法であった」とは学生の弁である。

11. 「筋書き」

次に紹介したいのは「筋書き」である。これは、漢字シートを提出させるごとに、その日の課題となっている漢字から一つ選んで、その漢字を覚えるための筋、つまり、メモリーエイドのためのストーリーを書いてくるというものである。これまで、筆者の側が学生にメモリーエイドを与えてきたのであるが、ネタもそろそろ切れてきたため、今回は学生自らに考えさせ、また、調べさせて、漢字学習の時間にクラスで発表してもらった。学生の視点からみた独創性に富んだ筋が多く、非常におもしろかった。以下は学生が考えてきた筋書きの例である。

酒 : bottle + script 酒
 真  真 : reminds me of a painting to ped
 步: when I'm walking I like as few steps as possible
 鉄: iron is a good metal for alloy heads.
 理: the king is logical; he measures everything in li

12. 「体書き」


「体書き」は体を使って漢字を書くことであり、遊び心も入れて、楽しく漢字を覚えるための手法である。まず、教師の側で書かせる漢字を用意する。漢字を書く学生は体を使ってそれを書き、クラスメートはその学生がどんな漢字を書いたかを当てるというものである。「小さい」「大きい」など、簡単な字の場合は手を伸ばしたり、足を広げたりして表現していたのだが、漢字が複雑になっていくと更なる工夫が必要になってきた。は学生が考え出した、体を使っての漢字書きの一場面である。

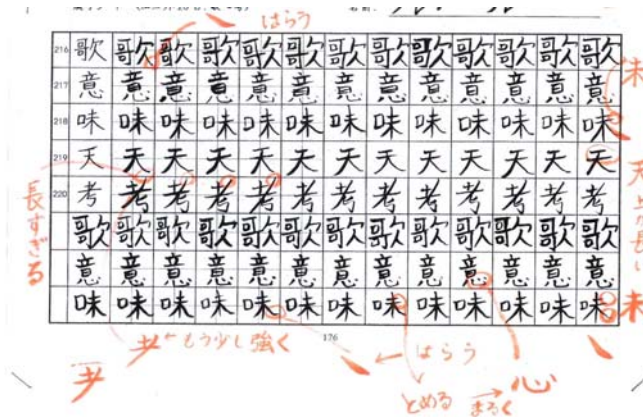
図4 「体書き」実演



1 3. 「手書き」

宿題を出した教師の責任として、自ら、シート一枚一枚、漢字一つ一つ丹念に見、「手書き」でフィードバックを与えた。これは膨大な時間がかかる作業であるが、学生一人一人の問題を把握できたとともに自分自身の漢字ティーチングの弱点を知ることができ、非常に有益であった。学生が筆ペンで書いてきた時には、こちらにも筆ペンでフィードバックを与えるなどの配慮をした (図5参照。)

図5 手書きによるフィードバックの例



1 4. 「試し書き」

十分に練習したところで、本当に学生がその漢字を習得したのかどうか試してみる機会が必要になってくる。その場を提供するものとして漢字のテストがある。筆者は今学期一回3分程度の「試し書き」の場を46回提供した。漢字テストは学生にとっても教師にとっても、どの漢字が問題となっているのかを知り得る唯一のものである。46回にも及ぶ漢字テストは、学生をかなり苦しめる原因となっていたのではないかと懸念していたのだが、実は、全ての学生が最も効果があると認めた学習法だったのである。(詳細は「1 8. おわりに」の章で述べる。)

1 5. 「縦書き」

5000曲以上の作詞を手掛けたという阿久悠(2003)は著書『ただ時の過ぎ行かぬように』の中でこう語っている。「縦書きはうなずきながら読んでいく。横書き

だったら全部首を横に振って否定しながら読んでいく。どっちがいいか言うまでもないでしょう。」考えさせられる言葉である。

ワープロやEメールの普及により、今日、書字方向は横書きが圧倒的に優勢である。現在我が校の初級クラスで使用している教科書も、宿題も、そして、試験の様式もまた全て横書きである。従って、あえてこちらで縦書きをする環境を作り出さなければ、学生は縦書きに触れる機会がまったくない。そこで、筆者は、板書の際には、出来る限り縦書きにし、学生に漢字シートを使って練習させる場合にも「縦書き」を推奨してきた。

以下は、現在、我が校で使用している漢字シートのサンプルであるが、このシートを用いて、学生が横に漢字を書いていくと、次のような現象が往々にして起こる。

漢字シート (ユニット9 A: 書～話) 名前: _____

93	書																		
94	聞																		
95	読																		
96	見																		
97	話																		

(1) 「聞」などは門構えの左と右が非常に離れてしまう。

(2) 「読」などはあたかも、「言」と「売」の二字であるかのようにになってしまう。

(3) 「書」から「読」ぐらいまでは丹念に練習したものの途中で時間切れになってしまつて「見」と

「話」はまったく練習せずして、クラスにくる。これらを防ぐ方法は、ただ一つ。縦に書かせることである。つまり、まず始めに、お手本をよく見て「書」を書く。次は、「聞」、そして「読」、「見」と、縦に一字ずつ書く。最後の「話」まで来たら、二行目に移り、また「書」「聞」「読」「見」「話」という風に縦に進めていく。この手法を用いれば、例え、途中で時間切れになつても、その日に書くべき全ての漢字を少なくとも、何回かは書いていることになる。このやり方を用いると一字一字集中し、注意を払いながら書かねばならないため、ある部分を書き忘れるといったような単純な間違いも生じにくくなる。

16. 「温故知新：漢字学習法」の評価はいかに

以上、見てきたような14項目からなる「温故知新・漢字学習法」を2009年秋季学期、2010年春季学期と二学期間にわたり導入してきたのであるが、果たして、この学習法は学生に浸透しているのだろうか。春学期が終了する一週間前に、学生に聞いてみた。

教師：皆さんは毎日どうやって漢字を勉強していますか。

学生1：鉛筆で何度も書きます。

学生2：私は筆ペンを使って何回も書きます。

学生3：メモリーエイドを自分で作つて漢字を覚えます。

学生4：体を使って書きます。

学生5：部屋の壁に指で何回も書きます。

学生6：手で書きます。
学生7：口で言いながら、何度も書きます。

以上から、学生は筆者が紹介してきた方法を、クラス外でも実践しているということが分かった。また、2010年春学期の最終日に17人の学生（2009年秋学期の構成員とは異なる）を対象に漢字に関するアンケートを実施した。

表1（次頁）は、その集計結果である（学生には英語のアンケートを配布した。アンケートの詳細については本稿末**参考資料1**を参照のこと。）

「漢字の何が難しいか」（質問1）との問いに対する答えとして、昨年同様の「覚えてもすぐ忘れる」（7人：41%）に加え、今回は「似通った漢字が次々にでてくる」が新たに加わった（12人：71%）。（複数回答）これは先学期より、漢字数が増した上に、「使」「作」「便」など似通った漢字が多数出てきたためであろう。

「一週間に何時間ぐらい漢字の勉強に費やしましたか」（質問2）という質問に対しては、3時間が6人(35%)、2時間が4人（24%）であった。すなわち、これは過半数（59%）の学生が一日平均20分から25分ぐらいを漢字の勉強に費やしたという計算になるが、実は、これは筆者にとっては驚くべき結果であった。それは、常日頃、学生が「漢字は難しい。一日にかなりの時間を使っているがなかなか覚えられない」と言っているため、筆者としては一日何「時間」単位で漢字を勉強しているものと考えていたからである。しかし、実際には、学生は20分から25分しか漢字学習に時間を割いていなかったのである。

アンケートの質問3から質問17までは「温故知新・漢字学習法」に対する学生の評価であるが、概ね好評であったことがみてとれる。特に、「空書き」は17人中16人までが有益な漢字学習法だったと答えている。また、学生にとって負担になりはしないかと危惧していた46回に及ぶ漢字テストにあっては、17人中17人が「役に立った」と答えており、それは筆者を驚かせるのに充分であった。また、質問17の「原稿用紙を用いて縦書きに作文を書くことは、漢字学習に役に立ちましたか」の問いに対しては、17人中16人までが「はい」と答えており、「もっと頻繁に原稿用紙を使いたかった。」「原稿用紙を使って書くのは非常に新鮮に感じた」とのコメントもあった。作文や漢字練習にワープロを用いる教師もいる昨今、筆者自身、非常に古いやり方だと考えていたため、こうした学生からのコメントは意表をつくものであった。

表1 漢字アンケート（2010年5月3日実施） 回答者17人

1	漢字の勉強で一番難しかったことは何ですか。	似通った漢字がたくさんある（12人：71%）。覚えてもすぐ忘れる（7人：41%）。	
2	一週間に何時間ぐらい漢字の勉強に費やしましたか。	7時間(1人:6%) 3時間(6人:35%) 5時間(3人:18%)2時間(4人:24%) 4時間(1人:6%)1時間(2人:12%)	
		はい	いいえ
3	220漢字は一年生の学生が一年で勉強するのに妥当な数だと思いますか。	15人(88%)	2人(12%)
4	空書き（指で空中に漢字を書く）という練習方法は役に立ちましたか。	16人(94%)	1人(6%)
5	指書き（鉛筆を持たず指で机の上を書く）は漢字を覚えるのに役に立ちましたか。	14人(82%)	3人(18%)
6	体書きは漢字を覚えるのに役に立ちましたか。	12人(71%)	5人(29%)
7	漢字のクイズ（46回）は漢字を覚えるのに役に立ちましたか。	17人(100%)	0人(0%)
8	筆ペンによる漢字の練習は役に立ちましたか。	14人(82%)	3人(18%)
9	宿題の漢字シートに対するフィードバックは役に立ちましたか。	15人(88%)	2人(12%)
10	漢字シートの余白にも漢字を練習することは役に立ちましたか。	14人(82%)	3人(18%)
11	筆に水をつけて黒板に書く練習法は役に立ちましたか。	13人(76%)	4人(24%)
12	習字による漢字練習方法は役に立ちましたか。	14人(82%)	3人(18%)
13	クラスで導入したゲームは漢字を覚えるのに役に立ちましたか。	13人(76%)	4人(24%)
14	漢字を導入した時にその漢字を使った熟語も一緒に紹介したのは役に立ちましたか。	15人(88%)	2人(12%)
15	一つの漢字を紹介した時に、同じ偏や旁を使った他の漢字も紹介したのは役に立ちましたか。	14人(82%)	3人(18%)
16	空書き、指書きをする時に一緒に画数も言うのは役に立ちましたか。	13人(76%)	4人(24%)
17	原稿用紙を用いて縦書きに作文を書くことは、漢字学習に役に立ちましたか。	16人(94%)	1人(6%)

17. 「温故知新：漢字学習法」の効果について

今回実施した漢字に関するアンケートでは「〇〇学習法は漢字学習に役に立ちましたか--はい、いいえ」に加え、「はい」の場合にはどういう点で役にたったか。また、「いいえ」の場合にはどういう点で役に立たなかったかも述べてもらった。表2はそうした学生の意見をまとめたものである。この学習法を導入することにより 1)漢字に対する興味の増大 2)定着率の向上 3)正確な筆順、バランスのよい字形習得の助長 4)漢字学習の効率性向上 5)漢字の意味や使い方の理解助長 6)反復練習に伴う退屈さの軽減 7)語彙の増加 8) 日本文化に対する理解助長 が可能となった。

特に「空書き」「指書き」「言い書き」は、1)定着率の向上 2)正確な筆順、バランスのよい字形習得の助長 3)漢字学習の効率性向上といった三つの分野に寄与しており、最も効果的な漢字練習法であることが分かった。ここで、注意を喚起したいのは、今回の導入でこれらの手法を初めて知った学生も多く、「効果

があってこんなに簡単にできる方法をいままでどうしてやらなかったのか」とのコメントがあったということだ。しかし、この三つの手法だけでは限界がある。14項目にわたる学習法をバランスよく導入してはじめて、より効果的な総合漢字学習が実現できるのである。

表2 温故知新・漢字学習法の導入により得られた効果

学習法	効果
⑧水書き ⑨筆ペン書き	漢字に対する興味を増大
①空書き ②指書き ③言い書き ⑬試し書き ⑦筋書	定着率の向上
①空書き ②指書き ③言い書き ④なぞり書き ⑤写し書き ⑥一人書き	正確な筆順、バランスのよい字形習得の助長
①空書き ②指書き ③言い書き ⑦筋書 ⑬試し書き	漢字学習の効率性向上 漢字の意味や使い方の理解助長
⑩体書き ⑪友書き	反復練習に伴う退屈さの軽減
③言い書き ⑫試し書き	語彙の増加
⑨筆ペン書き ⑭縦書き	日本文化に対する理解助長

18. おわりに

本稿で紹介した漢字学習法は、実は、なんら新しいところはない。読者の皆さんがすでにクラスで実践している、なじみの深いものである。しかし、ここで、ちょっと視点を変えてみようではないか。

我々、日本語教師にとっては古いと思われるもの、それは日本語学習者にとってはまったく新しいものになり得るということである。古いからもう使えないのではない。古いからこそ、そこには学ぶべきものが数多くあるのである。古いからこそ、そこには新しいものがあるのである。「温故知新：漢字学習法」はまさにその実践である。

参考文献

- 阿久悠 2003 『ただ時の過ぎゆかぬように--僕のニュース詩』 岩波書店
 岡篤 2008 『字源・さかのぼりくり返しの漢字指導』 ひまわり社
 佐々木正人 1983 「空書」行動と出現と機能—表象の運動感覚的な成分について— 『教育心理学研究』 31 pp.273—282
 佐々木正人 1987 『からだ：認識の原点』 東京大学出版社
 椿原正和監修 2008 『向山型漢字指導の技術』 明治図書
 T O S S 加賀 2004 『目から鱗の漢字指導法—こうすれば子どもは覚える』 明治図書
 伴一孝 2001 『子どもに力をつける基礎・基本の徹底システム』 明治図書
 向山洋一 2002 『向山洋一全集 35・子どもが熱中する向山型漢字・言語指導』 明治図書

